芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー 第4回演奏会

画期的なアカデミーがプロとの共演で新展開

３年の活動で多大な成果をあげた芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミーがスタイルも新たに第４回の演奏会を行う。アメリカ音楽中心の内容は興味津々だ。

©Marte Bjerke

芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミーは、東京芸術劇場が2014年に開始した、公共ホールでは稀なる、次世代のプロフェッショナル演奏家育成プロジェクト。学生や若手奏者の吹奏楽を通したキャリアアップが主旨だが、多分野の講師による「キャリアアップ・ゼミ」、東京佼成ウインドオーケストラのメンバーの「レッスン」や、「アンサンブルのコンサート」「アウトリーチ活動」を重ねた上で、第一線の指揮者を迎えた年度末の楽団演奏会に至る、重層的内容となっている。

2017年３月の第３回演奏会では、鈴木優人の指揮のもとで音楽的感興に溢れた演奏を披露し、３年の成果を知らしめた。そして在籍期間を終えた１期生が卒業。今年度は数名を加えた少数精鋭でスタートし、自己プロデュース等を重視したゼミ、受講機会を増やした個人レッスン、より活発化したアンサンブル公演など、個々の演奏家としての成長を主眼に置いた活動を行っている。

こうした経緯から、来る第４回演奏会は佼成ウインドとの“共演”で開催。斯界トップ楽団の奏者と共に音楽を作り上げる貴重な機会が実現した。

1年の成果を映す、見どころ満載の公演

今回の指揮は、日系アメリカ人のシズオ・Z・クワハラ。1976年生まれの彼は、ショルティ指揮者コンクールで優勝後、フィラデルフィア管やオーガスタ響等、欧米で活動し、日本の著名楽団にも多数客演。2014年と17年に佼成ウインドの定期演奏会を指揮し、16年12月には当アカデミーのゼミで講義を行っている、本公演に相応しいマエストロだ。

プログラムは、吹奏楽の発展の舞台となったアメリカの作品が主体。しかもクラシック系の作曲家によるハイクオリティの音楽が揃っている。以下Z・クワハラの言葉を引用しながらご紹介しよう。

冒頭のW.シューマン《ジョージ・ワシントン・ブリッジ》は、色彩的な音楽を書いた20世紀の重要作曲家が、「橋の様々な表情を音にした」モダンな佳作。続くデロ＝ジョイオの《中世の旋律による変奏曲》は、クワハラが「学生時代に、佼成ウインドの桂冠指揮者フェネルの元で演奏した」曲で、「シンプルな賛美歌の主題に、吹奏楽の力を活かした５つの変奏曲が大変貌して続く」。さらには《弦楽のためのアダージョ》で知られるバーバーの《交響曲第１番》。ロマン的な叙情性と緊迫感を相持つ単一楽章交響曲の「核心的な編曲」だ。そしてバーンスタインの《ウエスト・サイド・ストーリー》より〈シンフォニック・ダンス〉。この躍動的な名曲は、言うまでもなく愉しい。

また新作の初演も本公演の特徴。今回は藤倉大の《テューバ協奏曲》が披露される。ソロは“世界でたったひとりのソロ・テューバ奏者”エイステイン・ボーツヴィック。カーネギーホール等で演奏し、CDも大人気の超名手だ。ここは、日本が世界に誇る作曲家の新作、テューバの珍しい協奏曲、最高峰の奏者の妙技、アカデミー初の協奏曲挑戦……と見どころも数多い。

アカデミー生たちは、月２回のアトリウムコンサートでアメリカの楽曲を必ず１曲取り上げるなど、着々と研鑽を積んでいる。精鋭たちのフレッシュで熱い演奏を、「吹奏楽の音を活かせる魅力的なプログラム」（クワハラ）で楽しめる本公演に、ぜひ足を運びたい。

文：柴田克彦（音楽評論家）

「テューバ協奏曲」藤倉大

©Seiji Okumiya

この作品はテューバ奏者、エイステイン・ボーツヴィック氏がソロを初演するという前提に書いた。僕は作曲の際、いつもその作品の初演奏者と密接にやりとりしながら進める。今回はまず「テューバという楽器の魅力は？」「演奏時の快感はどういうときに生まれるか？」などの点が僕の興味を惹いていた。

僕は協奏曲を書くのが大好き。そして、テューバは本来ものすごくセクシーな楽器。この楽器を最大に活かした「世界」を表現できるのはもう僕しかいない！と思い込み（笑）書き進めた。そうしてできた楽曲は、すごく情緒豊かで、テューバの長いメロディにオーケストラが寄り添うように、まるでアイスクリームが溶けていくような感じで絡んでいく。エイステインも、「テューバはオーケストラの中では必要な低音を鳴らすだけのことが多く、ソロ的に演奏できる奏者が少ない」と言っていたが、この協奏曲でテューバは主役中の主役。長く、音域の広い音楽を官能的に吹き続ける。テューバってこういう楽器だったのか！と僕もこの作品を通してよく分かり、嬉しかった。
今回この作品が東京芸術劇場で演奏される機会に恵まれ、大変嬉しく思っています。

3月3日（土） 15:00開演 コンサートホール　詳細はP13へ
指揮:シズオ・Z・クワハラ　テューバ：エイステイン・ボーツヴィック　吹奏楽：芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー／東京佼成ウインドオーケストラ

指揮者シズオ・Z・クワハラによる事前レクチャー
1月28日（日）19:00～　シンフォニースペース（5階）

エイステイン・ボーツヴィック テューバ・ワークショップ
2月28日（水）19:00～　シンフォニースペース（5階）

詳細・お申し込みはHPへ

芸劇＆読響
0才から聴こう!!／4才から聴こう!!

春休みオーケストラコンサート

小さな紳士淑女たちに贈る本格派コンサート

春休みの風物詩ともなった「0才から聴こう!!／4才から聴こう!!」シリーズ。クラシック音楽との素敵な出会いは芸劇と読響がおくるオーケストラの響きで!

ソプラノ：コロンえりか　バリトン：岡昭宏　ナビゲーター：中井美穂
©Tetsuo Koike

音楽会の年齢制限を取り払った芸劇の名物企画

演奏会のチラシやチケットでよく目にするのが、未就学児お断りの注意書き。聴衆にも一定のマナーが求められ、大勢の聴衆が生の演奏に耳と心を傾けるコンサートでは、小さなお子さんの入場を制限せざるを得ないのが実情だ。

しかし、1990年前後あたりからだろうか。ホールやオーケストラでは、新たな聴衆の開拓という必要性から、また子どもがいるから演奏会に行けないという音楽ファンを繋ぎとめるために、未就学児でも入場可能な家族向け公演を開催するようになってきた。

東京芸術劇場が、事業提携している読売日本交響楽団の出演で開催している春休みのコンサートもそのひとつ。2008年春に第1回がスタート。さまざまに趣向を変えながら、なんと「0才から聴こう!!」と銘打って事実上年齢制限を取り払ってしまったのが2013年（当初2011年春に予定されていたが東日本大震災の影響で中止。初回は2013年）。今では春休みの名物企画となっている。

2回公演の対象年齢を分けた挑戦が好評

広いロビー・ホワイエを活用して、ベビーカー置場を確保したり、おむつ替えコーナーを仮設したりと運営側の態勢も至れり尽くせり。いつもより多少「にぎやかな」客席になるのは致し方ないが、オーケストラも客席の素直な反応に刺激を受け、張り切って演奏するから、まさに舞台と客席が一体となった素晴らしい演奏会となる。

2017年春の公演からは、午前の回を「0才から聴こう!!」、午後の回を「4才から聴こう!!」と、対象年齢を分ける試みに挑戦。乳幼児連れの方は周囲に気兼ねなく音楽を楽しめる午前の回、少しおとなになったお兄さんお姉さん連れは午後の回とすることで、音楽会としての密度も増したとお客様からも好評を得た。今年もこの芸劇オリジナルともいえる対象年齢別2回で開催する。

短く明るくノリがよく！選曲にもひと工夫

春休みオーケストラコンサートの構成で毎回苦心するのが曲目選び。何といっても、客席の大半はクラシック音楽にもオーケストラにも初心者の子どもたち。ちょっとでもつまらないと感じたり飽きてしまったりしたら、反応も遠慮がない。演奏効果にも響く。そこでこのシリーズでは毎回、短くて明るくてノリがよくて、心も体もウキウキするような曲を選ぶことを心掛けている。しかも、短い時間の中でオーケストラの醍醐味に触れ、クラシック音楽との素敵な出会いを楽しんでもらうために、演奏曲目はクラシック音楽の“ド真ん中”から選んでいる。

ウィーンゆかりの作曲家で構成した本格プログラム

今回は、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスという大作曲家の管弦楽曲やオペラの名曲と、ウィンナワルツで有名なシュトラウス一家の楽しいポルカで構成した「ウィーン音楽」特集。そして、これまで避けてきた長い交響曲の「一部」もあえて選曲。「運命」の愛称で知られるベートーヴェンの《交響曲第5番第1楽章》だ。たとえ音楽ファンでなかったとしても、あの「ダダダダーン」くらいはご存知のはず。たった一つのテーマが織り成す音絵巻に触れるこどもたちの反応も楽しみだ。

この音楽体験がクラシック音楽との素敵な出会いとなり、コンサートホールやオーケストラに親しみを感じてもらうきっかけになってくれることを願っている。

文：吉田雅之（「春休みオーケストラコンサート」構成演出）

3月29日（木） コンサートホール 11:30開演（0才から入場可）／13:30開演（4才から入場可）　詳細はP14へ
指揮：円光寺雅彦　ソプラノ：コロンえりか　バリトン：岡昭宏（第12回東京音楽コンクール声楽部門第1位・聴衆賞）　ナビゲーター：中井美穂　管弦楽：読売日本交響楽団

マタニティ コンサート

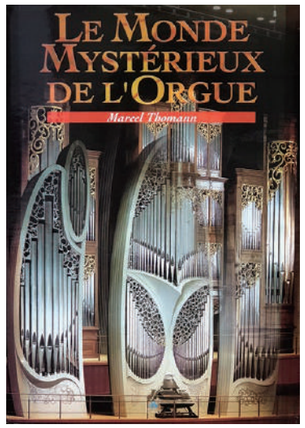
おなかの赤ちゃんと一緒に楽しむ、癒しの50分

小林沙羅　つのだたかし
©Nippon Columbia　©Shoji Onuma

もうすぐお母さんになるみなさまのために、おなかの赤ちゃんとゆったり楽しめるマタニティ コンサートを開催します。ソプラノ歌手、小林沙羅の美しくのびやかな歌声を、つのだたかし奏でるリュートの優しい調べとともに楽しむ、約50分のコンサートです。自身も一児の母である小林が自ら選んだ、《グリーンスリーヴス》などの素朴で可憐な響きのルネサンス音楽を中心としたプログラムで、身も心も癒される特別な時間をお過ごしください。

3月6日（火）　詳細はP13へ
14:00開演／19:00開演
シアターイースト
ソプラノ&ナビゲーター：小林沙羅
リュート：つのだたかし

パイプオルガン講座2017
第71回 -オルガン紀行 Vol.3- 日本



世界から注目される東京芸術劇場のオルガン

1998年にドイツのOlms Presseから出版された M. トーマン Marcel Thomann著『オルガンの素晴らしい世界 Die wunderbare Welt der Orgel』の表紙には、東京芸術劇場のパイプオルガンの写真が使われています(右上は2000年にÉditions du Signeから出版されたフランス語版『オルガンの不思議な世界 Le Monde Mystérieux de l'Orgue』)。日本での「寺社めぐり」「仏像めぐり」といったことに当たるのでしょうか、ヨーロッパ各国には「オルガン友の会」のような組織がたくさんあって、専門家を交えた「オルガンめぐり」や「オルガン巡礼の旅」が非常に盛んです。この本は専門書と言うよりは、そういった趣味を対象としたガイドブックです。

居ながらにして異なる時代様式の音楽を、オリジナルに近い響きで聴くことのできる芸劇のオルガンは、ヨーロッパでは注目されていて、自薦他薦の演奏希望者、「日本に行ったら見てくるように」と先生にすすめられたという若いオルガニストなどの見学、試奏希望者が後を絶ちません。

日本では大オルガンのほとんどが20世紀後半コンサートホールに設置されたので、ヨーロッパのように数百年前の歴史的オルガンがないのは当然ですが、逆に宗派ごと、地域ごとに異なる典礼のためというしがらみがなく、様々な国々の、様々な様式のオルガンが導入されている点が、ヨーロッパのオルガニストたちには驚かれています。

2018年1月18日の「パイプオルガン講座ーオルガン紀行ー」では、そういう日本のオルガン事情について取り上げ、日本各地のオルガンをご紹介する予定です。

文:小林英之(東京芸術劇場オルガニスト)

1月18日(木) 14:00開講 コンサートホール 詳細はP9へ
講師:新山恵理(東京芸術劇場副オルガニスト)
副講師:平井靖子(東京芸術劇場副オルガニスト)/マテュー・ガルニエ(オルガンビルダー)

1〜3月のパイプオルガンコンサート情報はカレンダーページをご覧ください。

仲道郁代 ピアノ・フェスティヴァル

超一流ピアニスト6名による“5台60指”共演!

数々の国内外のコンクールを制し、幅広い演奏活動を続けてきた仲道郁代。今年デビュー30周年を迎え、更なる演奏の“深化”と共に活動の幅を拡大し続ける彼女が、「ピアノの楽しさをもっと伝えたい」という熱い想いを胸に、「仲道郁代ピアノ・フェスティヴァル」を企画。マスタークラスとトーク&コンサートの2部から成るこのイベントには、通常では考えられない豪華な顔ぶれが揃っている。仲道を筆頭に、チャイコフスキー国際コンクールで日本人初優勝者となった上原彩子、英国と日本を拠点に世界各国で活動を展開する小川典子、日本とハンガリーを拠点に活躍する期待の若手、金子三勇士、さらにロン=ティボー国際コンクールで優勝以降、国内外数々の著名オーケストラ・指揮者と共演を重ねる清水和音と、ジュネーヴ国際コンクールで日本人初の優勝を獲得した萩原麻未の6名だ。コンサートは、2台ピアノによるラヴェルの《ラ・ヴァルス》にラフマニノフの《2台のピアノのための組曲》といった、ピアノ・アンサンブルの魅力を存分に味わえる曲目から、ホルストの組曲《惑星》から〈木星〉をはじめとするオーケストラ作品、パラキレフの超絶技巧ピアノ曲《イスラメイ》などが“5台60指”のための作品に生まれ変わって並ぶという、非常に華麗なプログラムとなっている。1台でも「一人オーケストラ」と称されるピアノが5台揃い、それを個性豊かな国際派ピアニストたちが6名で奏でるというまたとない企画。ここでしか聞けない演奏や編曲をぜひ堪能してほしい。

文:長井進之介(ピアニスト/音楽ライター)

3月16日(金) 15:00開講 出演者による公開マスタークラス
シンフォニースペース(5階)

19:00開演 コンサート 詳細はP13へ
※18:15より6人のピアニスト・トーク
コンサートホール

出演:仲道郁代/上原彩子/小川典子/金子三勇士/清水和音/萩原麻未 ほか
【お問合せ】ジャパン・アーツぴあ 03-5774-3040

東京芸術劇場&ミューザ川崎シンフォニーホール共同企画
第7回音楽大学フェスティバル・オーケストラ

準・メルクル
©JCH Fotodesign Christiane Höhne

名匠のタクトに導かれ若者たちが紡ぐ熱い響き

心あるマエストロと伸び行くオーケストラの交歓がそこにはあった。

2017年3月、ミューザ川崎シンフォニーホールで高関健指揮の<第6回音楽大学フェスティバル・オーケストラ>を聴いた。プログラムは「悲劇的」の愛称で知られるマーラーの長篇交響曲第6番イ短調。アーティスティックな高みを目指した熱き演奏に酔いしれ、手が痛くなるほど拍手を贈り続けた。

首都圏9つの音楽大学と2つの公共ホールが手を携えた<音楽大学オーケストラ・フェスティバル>の、春のメインコンサート。このフェスティバルは秋に大学別の公演を開催し、春に各大学選抜メンバーによるフェスティバル・オーケストラを創り、憧れのマエストロとステージの喜びを分かち合う。2014年春にはラドミル・エリシュカも登場した。

名匠のタクトに導かれ、懸命に楽の音を紡ぐ若者たち。来春の晴れ舞台も決まった。20年にわたって日本のオーケストラ、ファンと深い絆で結ばれ、後進の指導にも愛を注ぐ準・メルクルが2018年3月、<第7回音楽大学フェスティバル・オーケストラ>の指揮台に立つ。

最高だ。まさに「春の祭典」だ。オペラとシンフォニーの両輪で活躍。ドビュッシーのオーケストラ曲をすべて録音し、ドイツ・ロマン派の調べをこよなく愛するメルクルと若者たちが選んだプログラムを見よ。日独の美質をあわせもつこの指揮者は、奇をてらわない。楽曲の型にも精妙な演奏にも一家言をもつ。名作に求心的に寄り添い、結果、高揚感を醸す。

時空を超えた「春」の名曲を仲立ちに、準・メルクルと音楽大学フェスティバル・オーケストラが東京と川崎のステージを彩る。

きっとかぐわしい風が吹く。劇的な響きも舞う。

開演まで、もうすぐだ。

文:奥田佳道(音楽評論家)

3月24日(土) 15:00開演 コンサートホール 詳細はP14へ
3月25日(日) 15:00開演 ミューザ川崎シンフォニーホール
指揮:準・メルクル
管弦楽:音楽大学フェスティバル・オーケストラ
(首都圏9音楽大学+愛知2音楽大学選抜オーケストラ)

芸劇ブランチコンサート
~清水和音の名曲ラウンジ~

過去の芸劇ブランチコンサートの様子

平日お昼のひとときを、贅沢な室内楽アンサンブルで

2016年4月より、毎偶数月に開催してきた人気公演「芸劇ブランチコンサート~清水和音の名曲ラウンジ~」。ピアニストの清水和音を中心に、在京プロオーケストラの首席奏者や日本音楽コンクールの優勝者などが集まった“アンサンブル・サンセリテ”による、本格的な室内楽コンサートだ。アンサンブルならではの親密な空気のなか、一流の演奏家たちの音色で“耳馴染みのある名曲”を味わえる、クラシック初心者にもぴったりのシリーズである。

回ごとに作曲家や楽器に焦点を当てたテーマも魅力で、3年目となる2018年度も心躍るプログラムが並ぶ。4月は「やっぱりモーツァルトが好き!」と題し、東武東上線池袋駅の発着メロディとしておなじみの《ディヴェルティメント ニ長調》、《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》をはじめとしたモーツァルトの超有名曲を取り上げる。そして8月のテーマは「愛しきヴァイオリン」。J.S.バッハの無伴奏ヴァイオリン曲《シャコンヌ》、20世紀最高のヴァイオリニストと言われるクライスラー作曲の《愛の悲しみ》《愛の喜び》などの名曲が並び、ピアノとヴァイオリンの美しい響きを心ゆくまで堪能できるだろう。

平日のお昼のひととき、しばし日常を離れ、室内楽の音色に耳を傾ける贅沢な時間を楽しんでほしい。

コンサートホール 詳細はP11、HPへ
第12回 2月 6日(火)「ピアノ四重奏曲は美しい!」
第13回 4月18日(水)「やっぱりモーツァルトが好き!」
第14回 8月22日(水)「愛しきヴァイオリン」
第15回 10月24日(水)、第16回 12月19日(水)、第17回 2019年2月13日(水)
※6月の公演は、コンサートホール内エスカレーター改修のためお休みとなります。

出演:アンサンブル・サンセリテ
荒井英治(Vn) 大江馨(Vn) 藤江扶紀(Vn) 佐々木亮(Va) 鈴木康浩(Va)
富岡廉太郎(Vc) 伊東裕(Vc) 佐藤晴真(Vc) 西山真二(Cb) 竹山愛(Fl)
伊藤圭(Cl) 高橋臣宜(Hr) 清水和音(Pf) ※出演者は回によって異なります。

第12回~第14回チケット発売中(第15回以降は4月頃発売予定)
【お問合せ】サンライズ・プロモーション東京 0570-00-3337